

駿建 2013 Jul. Vol.41 No.2

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

SHUNKEN

Quarterly Journal of

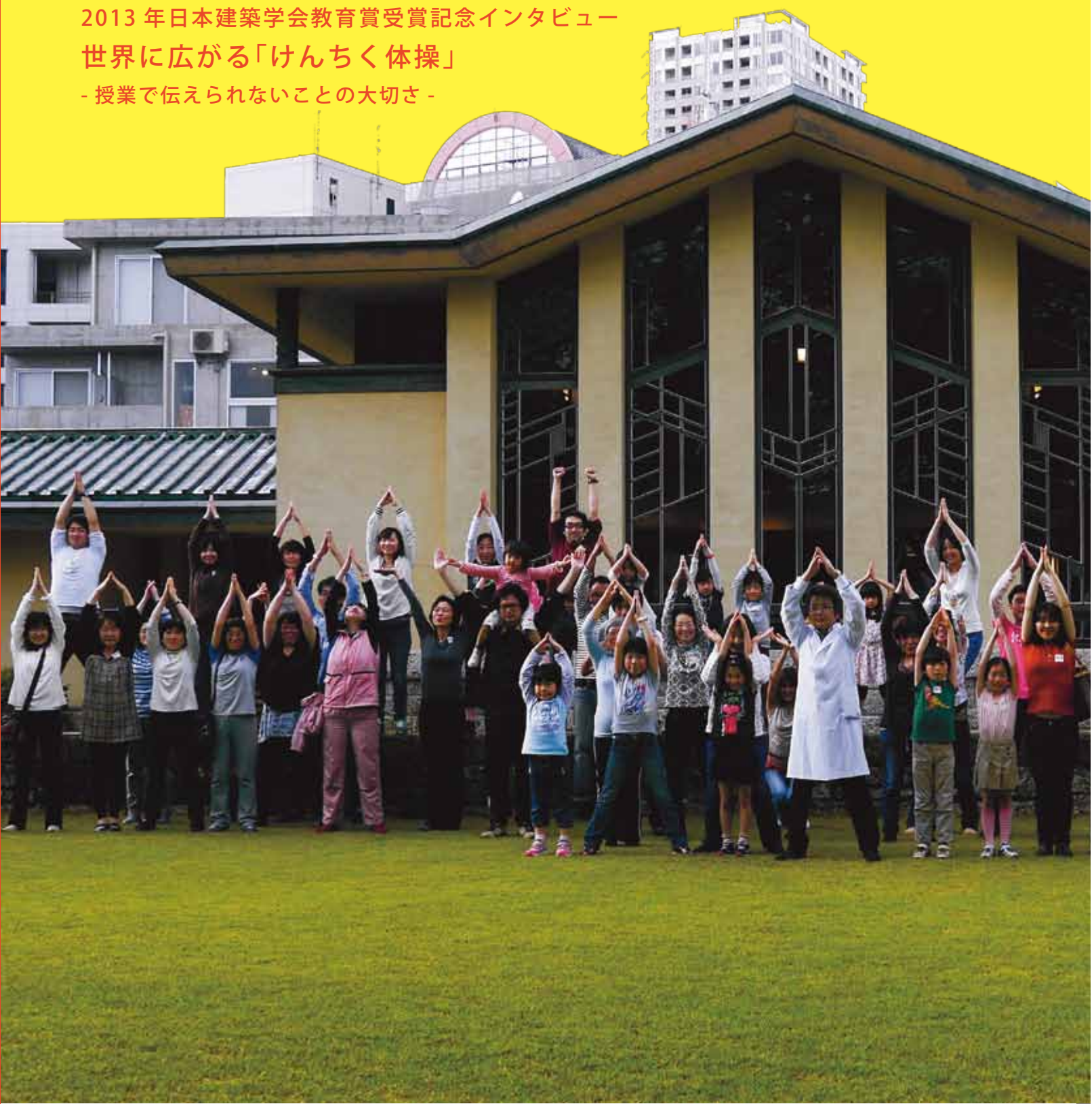
*Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College*

[SPECIAL FEATURE]

2013 年日本建築学会教育賞受賞記念インタビュー

世界に広がる「けんちく体操」

- 授業で伝えられないことの大切さ -



special feature

2013 年日本建築学会教育賞受賞記念インタビュー

世界に広がる「けんちく体操」

- 授業で伝え切れないことの大切さ -

Kenchiku-Taiso
in Bauhaus
Universität
Weimar

ここはドイツのバウハウス大学です。
みんなトンガリポーズで何をしているのかな？

「けんちく体操」ワークショップを中心とした建築教育プログラムの実践と普及活動

[2013 年建築学会教育賞（教育貢献）選定理由]

「けんちく体操」とは、建物の形を身体だけで表現する、ワークショップ型の教育プログラムである。建物を身体で表現するためには、まず建物の姿をじっくり観察し、その特色を自分なりに把握しなければならない。一人で表現できる建物もあるが、多くは複数の仲間と協同で形をつくらなければならない。そこで、建物を身体でどう設計するかについての議論が必要となり、建物を介して参加者間のコミュニケーションが生まれる。そして、身体で建物をうまく表現できたという創造体験が、建物へのさらなる関心を引き出す。老若男女の別なく、誰もが楽しめるプログラムである。

本業績の意義は、「けんちく体操」を通して、一般の人たちに普段は見過ごしている身の回りの建物の形に目を向けてもらい、建物と人との関

わりを認識してもらうことにある。加えて、子どもから高齢者まで、幅広い年齢層を対象とした、楽しみながら学ぶ建築教育プログラムであることに特色がある。「けんちく体操」は、小学校の授業で、また建築の基礎教育として工業高校や専門学校の授業に、さらには、まちあるきのワークショップ等にも活用されている。いずれも、身近な建築という環境をじっくり観察する目を養うという教育効果を生み出している。

江戸東京博物館と江戸東京たてもの園で教育普及事業として生まれた「けんちく体操」は、チームけんちく体操を結成することで、学校などの教育機関や各種イベントでも活用されるようになった。さらに、書籍『けんちく体操』やテレビ等の各種メディアを通じての社会への浸透は大きい。海外での普及活動も積極的

に行われている。チームけんちく体操のメンバーだけでなく、「けんちく体操」のマイスター制度をつくることで、「けんちく体操」の指導者を広げ、さらなる普及が図られている。このように、「けんちく体操」はその対象とする層が非常に広く、いつでも、どこでも、誰とでもできる、建築に関する生涯学習プログラムとなっている点での教育貢献が高く評価された。身近な建物の形を観察する力と協同作業によるコミュニケーション力を高める「けんちく体操」は、それを発展させれば、建物周辺の景観やまちづくりを考えることにもつながるなど、新たな展開も期待できよう。

よって、ここに日本建築学会教育賞（教育貢献）を贈るものである。

（日本建築学会ウェブサイトより引用）

けんちく体操って体操なの？

佐藤 慎也：今日は、昨年からリニューアルした「駿建」を編集・デザインしていただいている、大西正紀さんと田中元子さんをお招きしました。大西さんは、本学の卒業生でもあります。先日、彼らはワークショップをはじめとした「けんちく体操」という一連の活動で「2013 年日本建築学会教育賞（教育貢献）」を受賞されたということで、今回お話をうかがうことになりました。（米山勇さん（東京都江戸東京博物館研究員）、田中元子さん（モサキ・ライター）、大西正紀さん（モサキ・編集者）、高橋英久さん（江戸東京たてもの園学芸員）の4人による共同受賞）

今回は対話の相手として、今村雅樹教授に参加いただきました。今村先生は、ワークショップを含めた住民参加型プロセスをテーマに修士論文を書かれ、設計の現場でもそのことを実践されてきたパイオニアでもありますので、「けんちく体操」を広義なワークショップとして捉えながら、話をさせていただければと思います。

それではまず、ここに今回の受賞に関して、審査員による選定理由の文章があるので、ここから話をはじめたいと思います。

←左の審査コメントを読む…

今村：なるほど。まず「けんちく体操」のようなクリエイティブなものが、こうして世の中に受け入れられたことは、時代や社会と共犯関係になっているというか、とてもタイムリーなことですよ。恐らく、10 年前だと、ここまでの反応ではなかったと思います。

何年前かに NHK で放送しはじめた「アルゴリズム体操」が流行りましたよね。あれを観ていて、体操というものも変わってきているなと思ったんです。僕らの時代は、体操といえば、体育会系の体操だった。けれども、そのものの定義が変わってきたわけです。だから、「けんちく体操」というのも、その先に誕生した、今だからこそそのものと直感したんですね。

その昔、建築の力学的な力の流れを身体で表現した事例はありましたが、近代から現代にかけて、身体を動かす

ことで建築を表現するということは、恐らく一世紀ぶりぐらいだったのではないのでしょうか。それがとても面白いなと思ったわけです。

その一方でひとつ聞いてみたかったのは、「けんちく体操」の体操としての位置づけは、どのようなものなのか、ということなのですが。



2010.07 | 東京都庁舎のけんちく体操

田中：最初の頃は、よくいろんなところで、「けんちく体操」には動きはないのですかと言われて、私たちが困っていたのですが、ある日、体操の歴史を研究されている第一人者の稲垣正浩さん（21 世紀スポーツ文化研究所主幹研究員 / 元スポーツ史学会会長）という方に会いました。そこで稲垣さんは、体操の原点は、自分の好きなものになりきることにあり、喜びが伴ったものだったと教えてくれました。それがやがてオリンピックの誕生により競技化されることで、失われてしまった。だから、「けんちく体操」は、21 世紀に本来の体操を呼び起こした素晴らしいものだとしてくださって。以後、私

たちが「体操」と名乗る上で大きなバックボーンとなっています。

今村：「体操」とはもともとそういうものだったのですね。実際にワークショップには、決まりごとというものはあるのですか。

田中：ワークショップには次のような3つの約束があるんです。

1. 身体以外は使わない！
2. 自分の好きなようにやる！
3. 体操が完成してもすぐにやめない！（建物になりきることが大事です）

今村：なるほど。特に身体を通して体感するためには、3 番目は重要でしょうね。先ほど、競技化という話がありましたが、実際のワークショップの中では、その場を盛り上げるために、一つひとつの建物にチャレンジしながら、毎回、一番をはかせ役の米山勇さんが決定していくのです。同じ建物でも、やってみると本当に多様な表現が生まれてきます。

大西：まず「けんちく体操」には唯一の答えがないというのが、大前提としてあります。建物を観察し、捉え、身体で表現すること全てが正解です。けれども、実際のワークショップの中では、その場を盛り上げるために、一つひとつの建物にチャレンジしながら、毎回、一番をはかせ役の米山勇さんが決定していくのです。同じ建物でも、やってみると本当に多様な表現が生まれてきます。

身体と建築の相性ってあるの？

大西：例えば、次のページの写真は通称「鳥の巣」と呼ばれている北京国家体育場（2008/ ヘルツォーク & ド・ムーロン）を「けんちく体操」している写真です。





2010.07 江戸東京たてもの園。ワークショップは最初は1人から、そして徐々に人数を増やしていく

今村：鳥の巣が、こんなことになっているのですか！ そうか、例えば組み体操には型があるけれども、「けんちく体操」にはないのですね。本に掲載されているものも、たまたまあなたたちの一表現に過ぎないと。これはまさにワークショップですね。

ワークショップの起源は、ローレンス・ハルプリンというランドスケープアーキテクトが、妻のアンナ・ハルプリンと共に、1960年代に市民協働のまちづくりにワークショップを取り入れはじめたことですが、そこで言われていたのは、やはり「ワークショップ」というものは、頭だけではなく身体も動かす」ということでした。「けんちく体操」には、まさにそれが当てはまる。

そもそもこれはどなたが発明したもののですか。

田中：「けんちく体操」は、2002年に江戸東京たてもの園の研究員だった米山勇さん（現在、江戸東京博物館研究員）と同園学芸員の高橋英久さんによって、子ども向けワークショップとして誕生したものでした。最初は、会議の中で「こんな形の建物は……」と表現するのを見た米山さんが、これは遊びとして使えるのではないかと思いついたそうです。

今村：しかし、そんな昔からあったのですね！

大西：けれども、当初は少し恥ずかしいという気持ちもあったようで、それから10年間に4回しかワークショップが行われなかった。僕らは5回目が行われた2010年7月からメンバーとして加わり、そこから4人で「チームけんちく体操」として活動をはじめました。それから今日までの約3年間で40回以上のワークショップを各地で行い、またさまざまなコラボレーションの企画も行ってきています。



成田空港の登場口では、映像作品が流れている

今村：ワークショップは、日本だけではなく海外でも行っていると聞きました。そういう時は、題材としてその国の建物を取り上げるのですか。

田中：ドイツで行ったときは、ドイツの建物はもちろん、コルビュジエのロンシャンとかゲーテアナムといったヨーロッパの建物もたくさん取り上げました。日本でも最近では、地方へ行くことも増えてきました。これまでに山形や長野、名古屋、今年は夏に大阪や富山にも行きますが、そのときは必ず、

その地域ならではの建物も取り上げるようにしています。やはり地元の建物に目を向けてもらいたいし、現地の建物はワークショップでも盛り上がります。

今村：表現しにくい建物ってありますか。何となくモダニズムや透明感のあるものは難しそうですが。

田中：「けんちく体操」の本をつくるときに、何百という建物にチャレンジしてみたのですが、やはり垂直、水平、透明というのは、身体表現の限界を感じました（笑）。例えば、安藤忠雄さんやSANAAの建物などは難しいわけです。逆に、オリンピックの丹下健三さんの建物やカラトラバの建物は、有機的な形をしているので、どんどん候補として増えていったんですね。

佐藤：本の表紙にもなっている東京タワーのような、つまり構造表現的な建物の方が、人が身体で真似をしやすいということが分かりますね。

日本そして海外へ...

今村：海外へは、どのようなきっかけで広がりはじめたのですか。

大西：僕らがメンバーとして加わった一年後に、子どもに対する建築教育の賞「JIA ゴールデンキューブ賞特別賞」（審査委員長：伊東豊雄）を受賞しました。

それがきっかけとなって、次に2011年9月に東京で開催された世界建築家会議UIAの「建築と子ども」のセッションで、日本代表としてプレゼンテーションさせていただきました。そのときは各国のプレゼンターの方々にも、「けんちく体操」を体験していただいて。そうしたら、とてもいい反応でした。



2012.04 パウハウス大学でのワークショップ



2012.09 スウェーデンで行われたワークショップ

そうこうしていたら、約半年後の2012年4月には、ドイツのパウハウス大学から「子どもと建築教育」関連の国際シンポジウムへ招待をいただいて、現地へ飛びました。初日のレクチャー、二日目のワークショップも盛況に終わり。これがまたきっかけとなり、スウェーデンでワークショップを開催してくれる人が現れたり、現在でもチェコスロバキヤや韓国などからも問い合わせをいただいているところですよ。ゆくゆくは、ワークショップの方法をきちんとまとめて、オープンソースにした上で、世界中に広げたいと計画中です。

今村：それはすごい！そんな風に増殖していつているんですね。

田中：私たちだけで地道に広めていくことにも限界があるので、認定マイスター制度というものをつくりました。私たちの代わりに誰もがはかせ役になって「けんちく体操」ワークショップができるようにして、どんどん広げていきたいのです。

今村：だんだん分かってきました。米山さん、高橋さんによって発明された「けんちく体操」は、田中さん、大西さんが加わることで、あなたたちの編集能力によって、よりワークショップが洗練され、またより効果的に広めるデザインへと更新し続けてきているというわけですね。

mosaki としての活動の根源は？

今村：田中さんと大西さんは、mosaki

(モサキ)として活動されていて、「けんちく体操」に行き着くまでの話もあると思います。

今、それぞれの肩書きを拝見すると、大西さんは、「編集者・建築家」、田中さんは「ライター・クリエイティブファシリテーター」とあります。というのも、お二人が「けんちく体操」で行っていることというのは、とても肩書きだけでは表現しきれないクリエイティブなことだと思ったのです。もしかしたら、mosaki としての仕事全体に言えることなのかもしれませんが。そういったことを表現することは、なかなか難しくありませんか。

大西：特に僕は、あえて働くポジションを固定化していない、あるいはできない立ち位置を取っているの、とても難しいです。

少し mosaki の活動の話を読ませていただくと、そのはじまりは2000年、僕が大学4年生の時に遡ります。ちょうど今村研究室が誕生した年でしたね。当時、僕は表参道に建っていた同潤会青山アパートメントの保存再生活動「DO+（どうぶらす）」を共同主宰していました。高宮真介研究室に所属しながら、大学院時代も活動を続けたのですが、結果としてその建物は2003年に取り壊されました。そして、ほぼ同時に大学院を修了した僕は渡英して、ロンドンの設計事務所で働きはじめたのです。

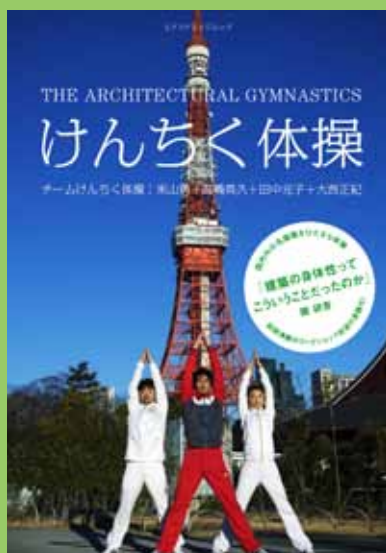
仕事はとても充実していたのですが、その一方で、ロンドンでの生活を通して感じたことは、一般の人々の建築に対する理解度が、あまりにも日本と異なると感じたことでした。どんな人も普通に建物や街並みについて話ができるし、古い建物は当たり前のように残るなかで、新しいデザインが次々に生み出されている。テレビをつければ、ゴールデンタイムに「今年の最も優れた建築は、ヘルツォークの〇〇です！」なんて番組をやっていたりするんですね。

そういった一連の体験から、やがて、そうでない日本で、一般の人々と建築とを取り持つ何かができないか。そう考えて、二人で mosaki として活動することをはじめたのです。

だから、肩書きを名乗りながらも、僕はそういった信念、思想を持った二人ですよ、ということをしてできるだけ発信しながら、本の制作やイベントの企画まで、これまでさまざまな仕事を受けてきました。きつと米山さんも、そういう僕たちを見てくれていて共感する部分があったから、「けんちく体操」の活動に声をかけてくれたのだと思います。

今村：大学卒業から、mosaki の活動、そして「けんちく体操」まで、そういう流れがあったんですね。

建築家も建築メディアをつくる編集者も、少し前の時代までは上から目線になりがちでした。この十数年でそん



これまでにこの2つの書籍を出版している。共に mosaki の企画・執筆・編集によるもの。他に DVD をポニーキャニオンから発売している。



2011.11 亀山西小学校3年生による「けんちく体操」の演技。今でも継続的に取り組まれているという

な時代も変わり、より一般の人々へ裾野を広げていくことが重要な役割を持ってきていますよね。例えば、コミュニティデザイナー・山崎亮さんのような新しい職種が注目されることなども、そういう流れの中にあると思います。

10～20年前なんて、本当に建築家に設計を頼むといことが、今以上に敷居が高かったですからね。その間に「建築プロデュース」という職種が生まれて、一般の人々に普及させようとしてきたわけです。

今では、「渡辺篤史の建もの探訪」や「ビフォーアフター」といった住宅系のテレビメディアもあって、一般の人の認知はそれなりに高まっているけれども、一方で、建築家は住宅だけをつくる人なんだという誤解も生まれている。本当は、建築家って、住宅だけではなくて、もっといろんな建物を設計しているんだよと伝えて欲しいという思いはずっとあるんです。そういう意味でも「けんちく体操」は、分け隔てなく建物を取り上げるツールだから、そこもいいなと思ったんです。

田中：確かに住宅を取り上げるメディアは増えていますが、そこで見えてくるのは、建築家は格好いい住宅をつくる人というメッセージが中心になっています。だからこそ私たちは、住宅にとどまらず、大きく文化として建築って面白いよ、興味深いものなんだよ、ということを一般の人に伝えたいのです。

大西：「けんちく体操」に対しても、も

しろん賛辞ばかりではなくて、時には「本を見たけど、くだらねー」とか、そんな反応も見られます。けれども、それは一瞬でも建築と出会ってくれたわけですから、私たちとしては、それだけで嬉しい。どんなきっかけでもいいので、建築って何だろう？ ってスイッチを押してあげる仕掛けをつくり続けていきたいと思っています。

今村：ロンドンの人々の建築的な民度が高いというのは、きっと住宅だけではなく、街や都市、あるいは他の分野にもまたがるような、文化的な建築全体の理解が深いということだと思います。だから、日本でもそのような文化的な普及が進むことが望まれますよね。

田中：より一般の人々に対する「けんちく体操」の普及の現れとして一番感動的だったのが、三重県の亀山西小学校の事例です。本を出版してから半年くらいたったところにこの学校の先生から連絡をいただいたんです。そうしたら、文化祭で3年生74名で「けんちく体操」をやるというんですよ。

すぐに三重県まで飛んでいくと体育館に通されて、目の前で74名による演技がはじまったんです。約15分にわたる「けんちく体操」は圧巻でした！音楽に合わせて次々と体操をしていく。その横で、子どもたちは自らマイクをもって建物の解説をしているわけです。さらに驚いたのが、自分たちが住む街にある、名物の茶畑といったランドスケープまで身体で表現してくれていて、オリジナルで発展させていたのですね。

後日いただいた74名の手紙の中には、「僕が大好きな建築家はカラトラバです」と書いてありました。大学生よりも建物に詳しい小学生が誕生しはじめているんです（笑）。

今村：いやー。それはすごいですね。まさにこれは教育賞にふさわしいと思います。

授業では伝え切れないこと

今村：今の話を聞いていると、ロンドンでの体験がひとつ大きなきっかけ、転機となったわけですね。

僕はお二人が渡英された少し前の2000年ごろ、大学の教職へ就いたわけですが、あの時代は、アート関係のプロジェクトをたくさんしていました。世の中としても建築の概念が揺るぎはじめた時期でした。僕は建築の「形」以前の問題から設計をスタートしなくてはいけないことに気づいて、ワークショップや住民参加といったことやをらない限り、次の時代の建築はないと、そんなことばかり考えていました。

佐藤：逆に今村先生に質問があります。学生に接する今村先生を見てみると、具体的な設計やデザイン以外の、そういったワークショップ、住民参加という考え方や振る舞いといったものを、学生たちにはあまり教えていないように思うのですが、どうでしょうか。

今村：それはあえてやっていないのですね。言い換えると、このことはできる人とできない人が明確に分かれるんです。こういったことが本当に面白いと思えない限りは、難しい。やっている人、やれている人は、才能なんです。だから、田中さんも大西さんもこうやって全国、世界でやれているのはひとつの才能なんですね。

従来の建築の設計というものは、ある程度教えやすいんです。ある定義やルールがあって、基本はそれに従えば良い。いわゆる手法を教えるということです。けれども、ワークショップや住民参加といったものには、最後は思想や哲学が必要になってくる。

大西さんは、そのきっかけが青山アパートやロンドンでの体験だったとお

っしゃっていたけれども、学生のみんなにはそれが無い。まあ、そういったことは卒業してから気づく人は気づくもので、本当はこういう気づきを与えられることが大学でできればいいのですが、これが本当に難しい。最後は、自分で気づいてもらうしかないところもありますからね。

今の仕事をしていく上で、田中さんにとっての気づきは、どのようなタイミングでありましたか。

田中：私は、もともと建築の専門的な勉強をしていませんでした。フリーターをしていた時に、ある日、本屋さんで建築家・カンボバエザの本を手にとって感動したことが、そもそも建築に興味を持ったきっかけでした。けれども、当たり前ですけど、建築のことを話す友達なんて周りにいない。そこで、いろんな人と建築の話をしたくて、インターネットの掲示板に友達募集！と書いたんです。2000 年ごろだからオフ会なんて言葉もない時代ですよ。その時は、学生から建築家、主婦まで何十人も集まって、その中大西がいて、青山アパートの活動にも参加することになりました。

そんなきっかけで、建築のことを独学していくわけですが、建築の雑誌を開いてもメタファーとか難しい言葉で書いてあったり、ただ単に白っぽい住宅がまとめられていたり。そういうものを目にする度に、素人なりの視点で、もっと普通の人々が普通に教養やたしなみとして、建築を楽しめるものにできないものかと思ったわけです。だから、誰しもがすんなり建築の楽しい世界に入っていくことができるようにすることが、私の仕事の上での基本的なスタンスになっています。

今村：なるほど、やはり心を突き動かされるような触発されるものがない限り、本当のクリエイティブは生まれにくいということがわかります。だから、学生たちにもこのことは伝える必要がありますね。大学というところは、確かにあるレベルまでの手法的なことは教えることができる。けれども、その先で小石につまづくように、あなたの心に新しい何かを気づかせてくれるのは、自分自身の行動と思考で獲得する

ものだと。

一昔前は、そうではなかったのだけれども、今の多様な価値観の中では、手法だけで教えられる建築では、たちゆかなくなってきた。だからこそ、そういったことが必要になっていくと思うのです。

佐藤：僕も研究室を持ち始めて6年が経つのですが、まわりの学生たちを見ていても同じことをよく思います。例えば、研究室に所属すると、本当にその研究室の先生にどっぷり染まる傾向にある。日大の場合、外から見れば、たくさんの面白い先生たちがいるのに、研究室の壁を越えた日常的なやりとりが、あまりにもないように思えます。もったいないですよ。

大西：少し話は変わりますが、この「駿建」というメディアも、今村先生がおっしゃる小石につまづくようなきっかけづくりや、佐藤先生がおっしゃるような研究室の壁を越えて多様な興味がわくような、そんなメディアにしたいと思っています。偶然つまづいてしまう仕掛けをたくさん散りばめていきたいのです。

佐藤：「けんちく体操」は多世代が熱中できるコンテンツだと思いますが、次は是非、「駿建」をきっかけに、より在学生に届くものづくりをしていってもらえると嬉しいですね。

今村：そうですね。さらに「駿建」を魅力的にしていってもらえると嬉しいです。あと、もしできれば、「駿建」と連動させたイベントを定期的にやってみませんか。先ほどの学内の授業の中では、伝えきれないもの、何か学生を触発するものがもっと大学の中に溢れている方がいいと思うのです。

大西：それはいいですね。是非また機会があれば、協力させてください。

田中：今日はありがとうございました！**駿**

■チームけんちく体操

「けんちく体操」とは、建物の形を身体でマネをするもの。“チームけんちく体操”は、世界に「けんちく体操」を！をモットーに、身体を動かしながら建物について学べるワークショップを全国各地で開催している。2013 年の夏は、富山、北海道、尼崎、東京にて開催予定。詳細はウェブサイトにて。

<http://www.kenchiku-taiso.com>

■田中元子・たなかもとこ（ライター／クリエイティブファシリテーター）
1975 年、茨城県生まれ。建築デザインをとりまく、作り手使い手それぞれのコミュニティ盛り上げ役。雑貨メーカー勤務後、建築系ギャラリーや日建設計、建築学会（全てアルバイト）を経て 2004 年、mosaki 共同設立。執筆及びディレクションを中心に活動。後藤繁雄 " スーパースクール "8 期生。2007-2008 年、co-lab クリエイティブファシリテーター。2009 年 - 日本建築学会文化事業委員。2010 年、「けんちく体操ウーマン 1 号」襲名。主な連載に『mosaki のイベント巡礼』（2005-2008 | 日経アーキテクチュア）、『妻・娘から見た建築家の実験住宅』（2009-2011 | ミセス・文化出版局）など。

■大西正紀・おおにしまさき（編集者／建築家）

1977 年、大阪府生まれ。2001 年、日本大学理工学部建築学科卒業。2003 年、日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了（高宮研究室所属）、修士設計 “ 駿建賞 ” 受賞。2003-2004 年、Ushida Findlay Architects (UK) 勤務後、2004 年、mosaki 共同設立。mosaki では編集及びデザインを担当する。後藤繁雄 " スーパースクール "9 期生。2004-2007 年、日本大学理工学部建築学科助手。2007 年 - 日本大学理工学部建築学科 NU フォーラム委員。2007-2009 年日本建築学会編集委員会委員。2010 年、「けんちく体操マン 2 号」襲名。2011 年 - 日本建築学会建築教育委員会委員（市民啓蒙ワーキンググループ）。



LAB THE WORLD

1

研究室を巡るインタビューシリーズ不定期連載

地震と建築の関係を見つめ続ける 対震構造研究室

インタビュー＝古橋剛 教授

日本、そして世界へと普及していく対震技術

— 古橋 剛教授、秦 一平准教授による
対震構造研究室とは、具体的にどのようなことを研究する研究室なのですか。

ここは対震構造の研究室です。一般的な耐震というよりは、応答制御による制震や免震という構造を考える中で、建物そのものを制御して、長寿命の建物をつくらうという研究を中心に行っています。

— この5号館の建物も 2007 年に耐震改修されて、3 階にダンパーを見ることができそうですが、例えばあのダンパーも先生によるものなのですか。

私は日本大学理工学部建築学科の教職に就いて6年になるのですが、それ以前は、三井住友建設で構造設計をしていました。最初の20年ほどは一般的な耐震の構造設計をやっていたのですが、後の10年くらいは免震や制振のみの設計に携わっていたんです。そこで、日大の石丸辰治先生とも付き合いがはじまり、共にダンパーの開発を行うことになりました。結果、私は制振構造をテーマに学位を取り、日大で先生になったというわけです。

— どのようなきっかけで構造設計から、免震や制震の設計へと変わられたのでしょうか。

明確なきっかけはなくて、ただ会社の中でそのような立場になったというだけでした。ただ、1995年の阪神・淡路大震災は、その背後で起きた大きなきっかけだったと思います。阪神・淡路大震災ももう18年も前のことになりますが、それまで日本の建物は頑丈だと言われ続けていました。けれども、そんなことはないということが一気に露呈したわけです。

建物の耐震性はまだまだ十分ではなかった。さらに現代のような複雑化して高付加価値化した社会では、建物はより耐震性が求められ、長寿命かつ建てる際のエネルギーロスを軽減することはもちろん、災害時にも経済的にロスしないものにしなければ立ちゆかなくなってきたのですね。そんなことが言われ続けた中で、2011年の東日本大震災が起きたのです。

— 阪神・淡路大震災が起こり、耐震性に注目が集まる中で、さらに東日本大震災が起きました。それによる影響はどのようなものでしょうか。

構造的に性能の高いものが求められることは増えてきていると思います。しかし、それが今後日本の中で、どのように定着していくかということは、まだ分からない段階です。阪神・淡路大震災のときも、震災後、2、3年の



超高層集合住宅の免震化も進んでいる。

間は、免震のマンションが建てられる事例がとて増えました。しかし、それを過ぎると、あっという間に減っていった。これが現実なんです。もちろん、そのあとまた地震が起きると増えたりもします。また景気の上下によっても増えたり、減ったりする。まさにこのようなことも実は、国民の考えや経済状況に左右されるところが大きくて、なかなか一筋縄ではいかないことなのです。

— 研究室を持たれてから6年が経ちますが、どのような研究活動が中心になっているのですか。

前任の石丸先生の時代から、免震・制震の研究をしていたこの研究室は、私が引き継いだ後も、基本的には同じことをテーマに取り組んでいます。ただ、私は先ほどお話しのように企業での設計者上がりですので、実験的というよりは、設計に近い部分での解析などの研究的が主体で、それを実験的に確認するという方法をとっています。実際の設計ではできないけれど、研究ではできるところを学生たちと共に行っています。また、外部のゼネコンや免震装置のメーカーと共に委託研究、共同研究なども行っています。



「日本大学理工学部駿河台校舎5号館」。築50年以上の建物を中間階(3階)で免震改修し再生させた。BELCA賞受賞。(改修設計:日本大学理工学部駿河台校舎5号館改修検討委員会+清水建設)

新築から既存まで、あらゆる建物に求められる対震



左：免震化した戸建て住宅。（構造設計：古橋剛） 右：伝統木造工法の寺院「常楽院」を最新の技術で免震化して建設した。（免震構造設計：古橋剛）

— 新築に当てはめる免震・制震というものとは別に、この5号館のように既存の建物について免震・制震を当てはめるということがあると思うのですが、それぞれが異なる分野なのでしょうか。

基本は同じです。だから、私がこれまで携わった免震・制震のプロジェクトも新築だけではなく、既存のものもたくさんやっています。

— 既存の建物に免震・制震を適用することも、それは一般的かつ有効な方法というわけですね。

その建物の条件によって取るべき有効な方法は異なってきます。例えば、2、3階建ての建物であれば、ブレースを入れることで耐震性を高めることが有効な場合もありますし、10階建てくらいになると、逆に下層にブレースが入りきらなくなることがあります。マンションなどは使いながら工事をしなくてはなりませんし、歴史的建築物はその外観を維持しなければなりませんから、そのようなことを考えていかなくはいけません。5号館の場合は、1、2階にダンパー（ブレース）を入れることが有効だったわけです。ただ、この5号館の場合は、建物の平面・断面計画で3階で切断して免震化することが有効だったわけです。外から見ると、1、2階のトグル付きダンパーが目立

っていますが、この役割は3階に設置した免震層の下部構造の剛性と耐力を調整するものなのです。

— そうなんですか！！ 一番、免震として頑張っているのは、どの部分に隠れているのですか。

実は、3階の柱頭に耐火被覆で見えない部分に免震装置が入っていて建物を支えています。また、壁の上に新開発の免震用のダンパーが設置されています。

— 新開発の免震用のダンパーとはどのように機能するものなのですか。

地震の揺れによって、ダンパーが動くわけなんですけど、動いたときに振動のエネルギーを吸収するだけでなく、擬似的な質量を生み出すものになっています。具体的には、実質量1トンのものが地震に応答する形で1,000トンの見かけの質量を生み出します。つまり、その瞬間には建物には1,000の質量が付加されることになり、地震の揺れをおだやかにすることになるのです。

内部を見てみるとネジとナットの関係になっていて、この動きによって1,000トンの重さをかけずに、建物に見かけ1,000トンの擬似的質量を生み出す。この研究を、石丸先生と一緒に行ってました。つまりこの免震装置は、ダンパーと質量という2つの効果

を持っているということになります。慣性質量ダンパーや減衰コマ、ダイナミックマスなどと呼ばれています。

— そのような免震装置をより向上させるために、研究室ではさまざまな実験を通じた研究をされているのですか。

そうですね。そうしてより高性能なものを世の中に広げることが大きな目的となります。実験には、装置レベルのものと装置を組み込んだ建物が実際にどうなるのかというものの二つがあります。後者は、なかなか実物大の建物では実験ができませんので、建築物を縮小した模型実験を行います。もちろんコンピュータによる解析も行います。さらに言えば、それらをディテールレベルに落とすところになると、ゼネコンの技術研究所やメーカーなどと共同して行っています。

— 現在、研究室には何人くらいの学生が所属していますか。また、就職についてはどうでしょうか。

対震構造研究室は、私と現在アメリカで研修中の秦准教授の二人で受け持っていて、合わせて20名弱の学生が所属しています。就職に関しては、半分



ダイナミックマスによるモード制御実験の試験体。

1トンの質量から1,000トンの擬似質量を生み出す

国ごとに独自の進化を遂げる対震技術！？

くらしいの学生が構造設計に進みます。もう半分は幅広く建築関係の仕事に就く傾向にあります。大学院に進む学生は、より設計や研究・開発に就きたいという具体的なイメージを持つ学生が多いように感じています。どのような職業に就くにせよ、対震に関する研究が社会に出ると役にたつと思っています。

— この 20 年でも日本では大規模な震災が何度も起こり、おそらくこれは日本に暮らす以上つきまとい続ける問題だと思います。同時にそれは、免震・制震という分野が常にブラッシュアップを求められるものであると言えるのでしょうか。

そうですね。この分野には完璧というものが存在しません。そして、そのことについて、私も大学の先生として、教育、技術、建築基準といったさまざまな側面から働きかけていかなければいけないと考えています。こういった考えは、やはり一企業で勤めていた時代には、あまり考えていないことでした。大学という教育と研究の現場に携わるようになって、それを強く思うようになりました。

— 因みに、海外における免震・制震の分野の動きはどのようなものなのでしょうか。やはり世界的に見ても地震国の日本が技術的にもトップなのでしょうか。

それが、一概にそうとも言えないのです。免震・制震については、日本が

世界一なのではというイメージはあるのですが、例えば、耐震設計そのものは、アメリカから入ってきているものが多いのです。さらに現在の免震の基礎が確立されたのは、約 30 年前のフランスです。フランス南部は、地中海に面するので、そこでは地震が起きます。それでも日本のように大地震が頻発するわけではない。そんなところで生まれた技術が、やがて日本に入ってきたというわけです。しかし、その後、日本ではその技術力を高めていくことになります。そして、ちょうど 2、3 年前ころには日本は“免震大国”と言われている状況になり、免震の 9 割は日本にあると言われていました。ところがこの数年では、例えば、中国でも免震が急速に普及しつつあります。中国の発展において、免震・制震というものの重要性が高くなっていったというわけです。確かに今でも日本はトップを行っているかもしれませんが、中国の厳しい追い上げがあるのが現状です。また、中国だけではなく、より世界へと普及しはじめている分野とも言えます。

— なるほど、今はこれまでとは逆に、日本の技術が参照されるようになってきている分野というわけですね。

そうですね。私のところにもよく海外から問い合わせがあります。

— そうそう、面白いことがもうひとつあって、こういった技術というものは、国ごとに違う進化をするんです。

— 本当ですか！？ 国ごとに違う進化を！？

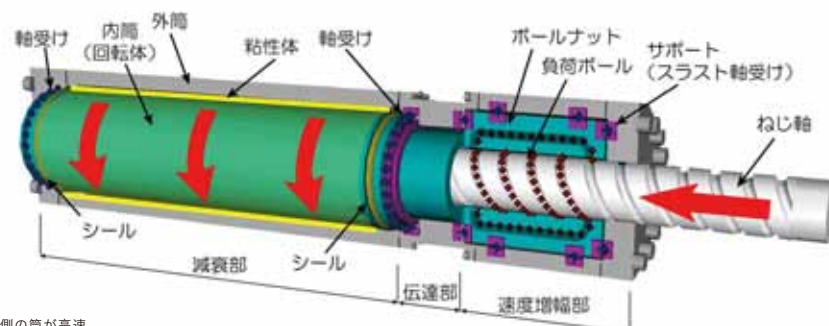
そうですね。こういった技術というものは、それまで培われた技術がそのまま広がっていくグローバルなものではないのです。逆にそのお国柄が反映される、ローカリゼーション（＝地域化）が起こるんです。例えば、日本でつくられた免震装置がイタリアに渡ると、ちょっと違うものに変容しているのです（笑）。

— 確かに同じゼネコンがつくるような建物も、国が異なってくると、そのつくられ方が変わってくるということは感じたことがあります。

そうですね。そのように技術の定着の仕方というものが、国によって違ってくるんです。この分野は、世界中の同じ分野の人々が集まるイベントもあつたり、海外同士の情報交流が盛んで、日本でも国際会議が行われたりします。そういう中で、互いに情報を交換し合い、自国で、さらなる技術的進化を遂げているというわけです。

— 各地で独自の進化を遂げていく技術。面白いですね！

— 今でも世界情勢の動きの中で、さまざまな国で免震・制震というものが求められはじめています。もちろん、私たちは日本を安全にすることが一番の目標なのですが、一方で、世界の中でその役割も果たしていなくてはと考えています。



減衰の原理図。軸方向の変形により内側の筒が高速に回転することで、地震のエネルギーを吸収すると同時に擬似的質量（ダイナミックマス）を発生する。

伝統的建造物群と近代建築のハーモニー

地産地消を味わう小江戸川越の旅

text= 吉野泰子 短大教授

5月11日(土)、小雨模様の中、オリエンテーション「温故知新」小江戸川越の旅が無事終了しました。

午前8時30分、日大理工学部駿河台校舎5号館脇アゴラに集合。1年生88名と専任教員8名の計96名が大型バス2台に分乗し、予定どおり10時に、川越市立博物館に到着。(今回は、川越市に減免申請により入場料を無料にしてくださいました。川越市のご配慮に深謝致します。)

今回のオリエンテーションの意図は、①伝統的建造物群保存地区の建物と近代建築との対照的な空間体験、②ヤオコー美術館の外構計画に短大専任教員が従事していることの親近感、③重要文化財遠山記念館に見る日本建築の醍醐味、④川越の名産品“さつまいも”膳を味わい地産地消を考えること、にありました。

市立博物館からバスで約10分、ヤオコー美術館の館長さんが日大短大生の到着を心待ちにして下さっており、その様子が当美術館のブログに掲載されました。

建築家・伊東豊雄氏とのコラボレーションや、BSデジタル放送で取り上げられた効果もあり来館者が後をたたないとのこと。外構設計時の着色図面を持参し、雨の中行われた山崎誠子先生の熱のこもった解説は、学生たちに教員の仕事の一端を身近に感じさせたことでしょう。構造から外構までコンパクトで興味深い教材が誕生しました。

館長に見送られ、江戸～大正時代の、情緒溢れる蔵造りや商家が立ち並ぶ一番街を散策し、当時の丁寧な左官技術を目の当たりにしつつ、市立博物館まで足早に戻り、バスで昼食会場に

移動。江戸時代からの名産品“さつまいも”料理に舌鼓を打ちました。

煮物・揚げ物・焼き物・酢の物と地元の旬の食材を味わう「地産地消」は、究極のエコライフと健康に通じます。主食からデザートまで、さつまいもづくしの創作料理を堪能したひと時でした。

食後は、重要文化財遠山記念館を探訪。日興證券の創立者・遠山元一氏が、幼少期に没落した生家を再興し、苦勞した母親へと、昭和8年から2年7ヶ月を費やして完成させたもので、その邸宅美に対し、80名余の学生諸氏から賞賛のメッセージが寄せられました。

「もう少し見学時間をとって欲しかった。」「多くの職人技を見ることができ、説明も良かった。また、個人で訪れたい。」など、重厚な日本建築に触れ、本物が持つ普遍性が学生諸氏の心に投げかけたメッセージは、貴重な財産となりました。

吉田茂総理と囲碁を嗜んだ和室や独特の半屋外空間、度肝を抜かれた面々が興奮した面持ちで、小走りに空間体験を急いでいるシーンに目を細め、実空間に身を置くことで、少なからず五感に訴えた記憶を糧に、個々人が「自主創造」に通じる何らかのヒントを手繰り寄せたとしたら、まさに教師冥利に尽きます。

川島町から関越自動車道経由で、予定通り神田駿河台に17時30分到着。船橋短大へは渋滞で時間を要しましたが、19時30分には全員無事帰路に就くことができ、何よりも参加者の満面の笑みが印象的でした。皆様、御協力ありがとうございました。



1. 「時の鐘」を望む。蔵造り資料館界隈 2. 川越市立博物館。商家の模型に見入る学生たち 3. 重要文化財遠山記念館の和室にて学芸員による解説を受ける 4. ヤオコー美術館内部にて学生たちの記念撮影



研究室、そして大学の垣根を越えた被災地支援活動

石巻市雄勝半島の復興を目指して

text= 山中新太郎 准教授

日本大学雄勝スタジオでは、2012 年より佐藤光彦教授と山中新太郎准教授を中心に、東北大学、東京藝術大学、立命館大学の建築系学科と連携して、石巻市雄勝半島の10 余浜の高台移転などの復興計画ビジョンを作成してきた。

雄勝での高台移転計画の難しさは、①各集落の規模が小さく分散していること、②平坦な土地が極めて少ないこと、③幹線道路が少なくアクセス可能な移転候補地が限定されることなどである。

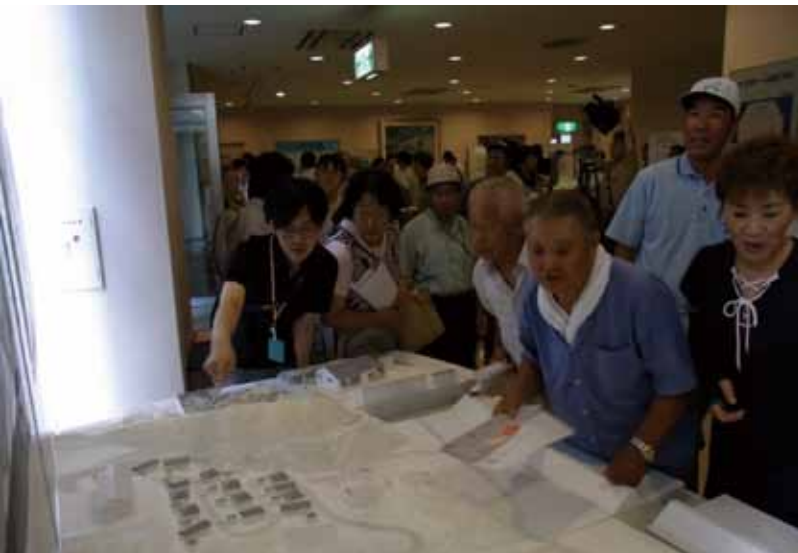
各集落では漁業などの生業をもとに相互扶助的なコミュニティが形成されており地縁意識が強く、それぞれの集落は世帯数や生業、地形や周辺環境などが異なっている。そのため、小規模な各浜毎の特性に応じたきめ細かな計画が必要である。

旧雄勝町は 2005 年に石巻市と合併したが、地域では市の出先機関である雄勝総合支所が住民サービスの窓口になっており、行政と住民の間に、いわゆる「顔の見える関係」が残っている。雄勝地区では、雄勝総合支所が中心になって大学と住民、土木コンサルタントらをつなぎ、集落ごとに復興計画づくりが行われてきた。

2013 年度には「平成 25 年度理工学部プロジェクト研究」に採択され、まちづくり工学科の横内憲久教授、八藤後猛教授、川島和彦准教授、短期大学の山崎誠子准教授、理工学研究所の小島陽子研究員、落合正行研究員らと共に、復興まちづくり研究を学際的な立場で行いはじめた。波板地区コミュニティセンターの設計も始まり、建築やまちづくりへの実践的な研究活動が精力的に行われている。



これまでに佐藤光彦研究室、山中研究室所属をはじめとする設計計画系の4年生や大学院生が、このプロジェクトに関わってきた。各地で被災地の生の声を聞きながらフィールドワークを行い、住民と対話を続けながら高台移転についての具体的な提案を継続的に行ってきた。



Report

関西研修旅行レポート

古建築から近現代建築 までを巡る5日間

[奈良・京都・神戸]

関西三都市建築見学ツアー

こ、この建物は何！？
何でこんな形をしているの？
いつ、なぜ建てられたの？
つくられ方はどうなっているの？
日本にはまだまだ見るべき建物がたくさんあります。

Three Cities <Nara - Kyoto - Kobe>

建築史・建築論研究室では、毎年2～3月にかけて関西研修旅行を実施。36回目を迎えた今年の関西研修旅行は奈良、京都、神戸の三都市を5日間で巡り、古建築から近現代建築までをトレースできる濃厚な旅行となった。建築史・建築論研究室の大川三雄教授と重枝豊教授をはじめ、佐藤光彦教授、佐藤慎也准教授、山崎誠子短大准教授など設計計画系の先生たちも参加した。(参加者学生40名、引率教員9名)

毎年、この旅行の目玉は、なんといっても一般公開にはならない社寺仏閣の保存修復現場を担当者の方の説明と合わせて見学できること。今回は奈良の興福寺中金堂の建設現場と京都知恩院御影堂(竣工1639年)の修復現場を見学した。近代建築では修復工事が完了したばかりの伊東忠太設計の西本願寺伝道院(竣工1928年)の見学を行った。最終日は建築家・竹原義二氏(無有建築工房主宰)に協力いただき、竹原氏の恩師、建築家・石井修の神戸・目神山の住宅作品を内部まで見学。さらに大阪の長屋のリノベーション「豊崎長屋」(2007年改修)や認定こども園「あけぼの学園」(2007年竣工)の現場での熱い解説を聞くことができた。

建築に対する視野を広げるまたとない機会。興味のある皆さんはぜひ、来年以降参加してみるのはどうだろう。今回は、3名の方にレポートを書いていただきました。

[日程・行程]

- 2月24日(日): 法隆寺(中門、金堂、五重塔、夢殿、講堂、食堂)、法起寺、慈光院、十輪院、新薬師寺
- 2月25日(月): 東大寺(南大門、大仏殿、鐘楼、開山堂など)、興福寺中金堂《建設現場見学》、黄檗山萬福寺、萬福寺第二文華殿、法界寺阿弥陀堂
- 2月26日(火): 妙心寺塔頭(退蔵院など)、知恩院・御影堂《保存修復工事現場》、清水寺
- 2月27日(水): 京都ハリストス正教会、祇園閣、西本願寺伝道院、聴竹居、大山崎山荘美術館、佳水園
- 2月28日(木): 目神山の家、目神山・石井修作品、豊崎長屋、認定保育園あけぼの学園

法隆寺金堂

身舎・庇と裳階の関係

text=里井レミ(修士2年 | 建築史・建築論研究室)

私が法隆寺金堂を訪れたのは二回目である。一回目に訪れた際は、「これがかの有名な法隆寺か!」という感動と、その優美な雰囲気を目を奪われてしまった。二回目は、大学院の建築意匠論の授業の中で、禅宗様の裳階について勉強したこともあり、もう少し落ち着いた気持ちで見学ができた。そして、金堂の重厚さに比べて周りを囲む裳階部分が切り離された、取って付けたような軽さを感じてしまった。

この違和感は一切何だったのだろう。

この時代の建築は、仏教の権威を象徴するものであったため、上層部は外観を大きく見せるために造られた。上層部の周囲には卍崩しの高欄、人字形の割束などで装飾されている。しかし、床板は張られておらず、二階としての機能は持っていない。

下層部は軒を深く出し、建築を大きく見せている。この深い軒を支える側柱によって庇が造られた。

さらに、裳階が庇の周りを囲んでいる。下層屋根の軒が深いために、身舎の瓦葺きとは異なった板葺きの屋根や、連子窓を用いて軽快なリズムを表現している。裳階がない金堂の姿を想像してみると、中央を膨らませた太い柱を見せるより、裳階を付属させることによって金堂に軽さを与えているように

思える。しかも、裳階屋根を最小限の低さに設定することにより、一段と軽やかに見せている。その結果、重心が下方に移り、金堂の独特な安定感を作り出しているのだろう。つまり、法隆寺金堂において、裳階は庇を保護すると同時に、全体に軽やかさと安定感を与えているのである。

駿



法隆寺金堂(7世紀後半)



1. 法起寺三重塔 (706) 2. 東大寺大仏殿 (1205) 3. 東大寺南大門 (1119) 4. 十輪院本堂 (鎌倉時代中期) 5. 西本願寺伝法院 (伊東忠太/1912) 6. 7. ハリストス正教会 (松室重光/1903) 8. 9. あけぼの学園 (竹原義二/2007) 10. 知恩院御影堂 (1639)

東大寺開山堂

一間堂を包み込んだ建築

text=加藤千品 (修士2年 | 建築史・建築論研究室)

東 大寺大仏殿の東側、若草山の麓の傾斜地を登ったところに三月堂があり、すぐそばに東大寺開山堂がある。普段は立ち入ることができない新禅院という塔頭にあるため、この建物の存在に気付かない人が多い。この建物は、鎌倉時代に大仏様という新しい建築様式をもたらした重源という僧によって建てられた、数少ない遺構である。

開山堂は、東大寺を開いた僧侶の良弁を祀るための施設である。現在では方三間（ここでは間は寸法の単位ではなく、柱のスパンの数）の堂であるが、重源によって建てられた当初は、大仏様の特徴を持つ方一間の小堂だった。

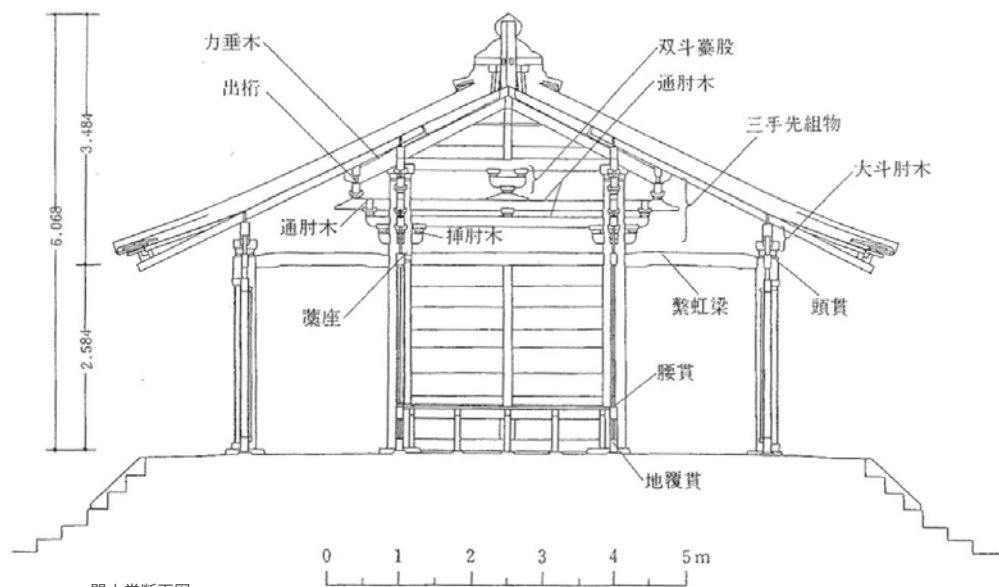
一間堂内部の天井は変っている。仏堂では普通、格天井などの天井を張るか、垂木を見せる化粧天井だが、この建物では隅木と力垂木という部材を八方向に放射状に配し、それに横板を張っているだけである。そのため仏堂らしくないという印象を受ける。一間堂として創建された時には、仏堂としてよりも、大きな厨子（仏像や経典などを安置する）として造られたのではないかと想像したくなる。

ところが、一間堂が建てられた約 50 年後の建長 2 年 (1250)、現在の場所に移築され、その際に大改造を受けている。方一間の既存部分をそのまま残し、そこから周囲に地垂木を架けて一間の底をまわし、それらをまとめて一

つの屋根で覆っている。新しく付加された空間は外陣と呼ばれ、儀式あるいは参拝時の人の礼拝空間であることを示している。つまり、礼拝のための空間の中に、入れ子のように神聖な厨子が納まっているという二重構造になっている。開山堂改造時の一間堂を方三間の堂で包み込むという発想は、もともとあった僧侶（良弁）の専有空間に、礼拝の空間を併存させるという、二つの空間性の違いをあえて強調する空間を創出しているのである。

もう一度復習を！

下は、開山堂の断面図。名称がいくつも書き込まれていますが、日本建築史の授業でも習った社寺仏閣の各名称を、あなたはいくつ覚えていますか？ 名称の読み方と何を指すのかをもう一度チェックしてみよう！



開山堂断面図

出典=『日本名建築写真選集第2巻』（著：宮本長二郎/新潮社/1992）



東大寺開山堂（12世紀末）



法界寺阿弥陀堂 立体曼荼羅の鞘堂 text=佐藤光彦 教授

驚いた。こんな空間に出会えるとは。法界寺阿弥陀堂が再建されたのは鎌倉初期のようだが、その外観は檜皮葺の緩い方形屋根と裳階によって、たおやかな平安期の仏堂の姿をまとい、周囲の風景の中にゆったりと佇んでいる。

低い裳階をくぐって内部に歩を進めると、外観からは想像も出来ない世界が待ち受ける。中央には丈六の阿弥陀如来坐像（約 2.88m）。四天柱には当時の彩色が残っており、阿弥陀如来像とあわせて金剛曼荼羅が構成されていたという。これを取り囲む底部分には、ひたすら等間隔に平行垂木が巡っている。藤原氏一族の持仏堂にふさわしい絢爛たる曼荼羅を浮き立たせるように、垂木の反復によるニュートラルな空間が巡らされ、さらに周囲の外部環境と調停を図るように裳階が囲む。外部から足を踏み入ると、少し腰高な空間も相まって、浮遊感すら覚える。図式

的には立体曼荼羅を収容するための二重の鞘堂のようにも見えよう。中央の四天柱と側柱の間に繋ぎ梁が無く、構造的な表現が見えにくいことも、その空間性の純粹さを高めているように思える。

ここで、重源による大仏様の傑作、浄土寺浄土堂を思い出した。一間 20 尺（約 6m）の方三間という大スパンを、野太い朱塗りの柱梁が縦横に飛び交い、その構成が全体の構造と内部空間を同時に規定し、中央の阿弥陀三尊像上部

に向かって屋根形そのままにせり上がる。ダイナミックで圧倒的な空間である。法界寺が、あくまでも日本的な建築言語と構法の組み合わせ（和様）の中に異空間をつくり出しているのとは対称的だ。ほぼ同時期につくられた阿弥陀堂で、ここまで対極的な空間が実現されているのも面白い。

ここ数年、古建築に興味が出てきて、毎年のように参加しているが、毎回目から鱗が落ちるような建築に出会える。関西研修旅行は楽しい。

法界寺阿弥陀堂（鎌倉時代初期）



* 建物の内部は撮影不可なのだが、Googleマップでは堂内を360°パノラマで見ることができます。ぜひ「法界寺阿弥陀堂」で検索してみてください！

News & Topics

1 | 建築学科4年生の江崎桃子さん、行徳美紗子さん、小島弘旭くんが、「レモン展 Portfolio Review 2013」にて、各賞を受賞！

「レモン展 Portfolio Review 2013」で、建築学科4年生の3名が各賞を受賞した。Portfolio Review とは「レモン展（学生設計優秀作品展）」の学生ワーキンググループが主体となり、レモン展の会期に合わせて同会場で開催する学生企画。個人の制作物や活動記録をまとめたポートフォリオ（作品集）が募集され、選ばれたものは会場にて展示され、さらに審査員によって審査されるというものだ。今年のテーマは「まだ見ぬ自分」。昨年から引き続き、建築だけではなく、服飾・プロダクト・グラフィックなど、様々な分野からの作品が集まった。次はあなたもチャレンジしてみよう！ 今回は、受賞者3名の声を届けます。

| 安東陽子賞 特別賞

| 江崎桃子（建築学科4年 | 佐藤光彦研究室）

「ポートフォリオを分かりやすく伝えるために、住宅課題で設計した作品のコンセプトであった“フレームの重なりと内外の関係”を立体で見せようと、飛び出す絵本のように模型が飛び出すものをつくりました。ポートフォリオは展示されるものなので、口では説明することができません。だから、見た人に一目で伝わるものをと常に考えて製作しました。講評会の際に、審査員の方々には、たくさんのアドバイス、改善点を言うていただきました。

これからさらにそこを直して良いものにしていきたいと思っています。この企画では、来場者の皆さんのコメントもいただくことができます。自分で思っていたことは別の視点からいただいた、いろんな評価から気づかされたことも多かったです。普段の設計課題は、提出したらすぐに次の課題へと移ってしまい、手直しをする時間はほとんどありません。だからこそ、こういった企画に参加することは、自分の作品を見つめ直す良いきっかけになると思います。遊び心を持って取り組むと、見る人の興味を引くことができるということを今回強く感じました。」



| 野老朝雄賞

| 行徳美紗子（建築学科4年 | 佐藤光彦研究室）

「私は、設計課題として取り組んだ集合住宅の案を、「設計の始まりから終わりまで」「後に学んだこと」「その当時使っていた資料」などをまとめ、その上に書き込みながら使い込んでいくポートフォリオをつくりました。そうすることで、当時は気づけなかったことや新しい発見が生まれるのではないかと考えたのです。ポートフォリオを一冊の本としてまとめる上で、1ページ1ページどんな紙を使ったら

良いのかという細かいところまで注意してつくりました。レビューに参加することで、自分がそのポートフォリオに対して考えてもいなかった視点や意見を、さまざまな審査員からコメントしていただいたことがとても勉強になりました。また、来場された方々に自分の作品を実際に手に取って見てもらえることは、とても嬉しいと思いました。ポートフォリオレビューは作品の表現方法や、捉え方を学べる良い機会だと思います。だから、今後も後輩たちには是非参加してもらいたいですね。」



| 西田司賞

| 小島弘旭くん（建築学科4年 | 古澤研究室）

「普段の課題では、図面や模型といった表現を使いますが、今回は年齢も立場も関係なく、多くの人たちが建築に親しめるきっかけになるものにしたいと思いました。そこで、僕は学部3年次の課題「図書館」の案を能動的に関われるように、立体化した積み木パズルと2つの小冊子にプロダクト化したものをつくりました。元々の提案は、さまざまな形と内外の関係がテーマでした。外部の形をアクリルの透明な積み木で、内部をMDFの不透明な積

み木として製作しました。モノとしての質を上げるために外注したので、出費が大きくなったことには驚きました（笑）。

今回の製作を通して、改めて伝える楽しさと難しさに気づかされました。また、思ってもいなかった切り口の評価をいただけたのも良い経験でした。一方で、小口の処

理に対してなど、いくつも批判をいただいたり、建築表現に対する姿勢を正される思いもしました。今回のレビューは、自身の作品や表現に改めて向き合い、「どうすれば伝わるか」をさらに考え、その上で、来場者や審査員の方々、周りの方々から反応がいただける貴重な機会でした。」



News & Topics

2 | 横河健教授が、第 19 回千葉県建築文化賞、第 6 回横浜・人・まち・デザイン賞を受賞！

●横河健教授が設計した「桜井邸／多面体の屋根 館山」(右写真上段)が、第 19 回千葉県建築文化賞(景観上優れた建築物部門)を受賞、「THE TERRACE / Park Side Cafe」(右写真下段)が、第 6 回横浜・人・まち・デザイン賞(まちなみ景観部門)を受賞した。



○千葉県建築文化賞

<http://www.pref.chiba.lg.jp/kenchiku/bunka/19.html>

○横浜・人・まち・デザイン賞

<http://www.city.yokohama.lg.jp/toshi/cihiikimachi/press/13042400.html>



■書籍出版

●田所辰之助短大教授が監修した『Le Corbusier Redrawn The Houses ル・コルビュジェの住宅 3D パース全集』(右上段、スティーヴン・パーク著、菅しおり訳、エクスナレッジ)が出版された。サヴォア邸をはじめ代表的な住宅 26 作品を断面パースなどで紹介、コルビュジェの空間構成手法がビジュアルに理解できる。

●大川三雄教授、田所辰之助短大教授が執筆(解題)した『住宅建築文献集成』(第 4 期配本、内田青蔵編、柏書房)が刊行された。日本の近代住宅の発展過程を知るうえで不可欠な古典的名著を精選、復刻したシリーズで、大川教授は第 25 巻『北尾春道「床の間の構成(装飾篇)」・藤井厚二「床の間」』、田所短大教授は第 23 巻『柘植芳男訳「生活最小限の住宅」』をそれぞれ担当した。

●山崎誠子短大准教授は、著書「緑のランドスケープデザイナー—正しい植栽計画に基づく景観設計—」(右中段、オーム社)を出版した。基礎調査の基本からプランニング手法、建築用途に応じたランドスケープデザインの方法、植栽計画のポイントなど実際の設計作業にしたがって、知っておくべきことのみを具体的に解説した 1 冊となっている。

●山崎誠子短大准教授は、著書「植栽大図鑑 - 樹木別に配植プランがわかる -」(右下段、エクスナレッジ)を出版した。樹木の特徴を把握して、適切な種類と量の緑を加え、樹木がそこで快適に生長することができる環境をデザインするための必須書籍である。

■論文掲載

●富田隆太助教、井上勝夫教授連名の原著論文「床構造及び床仕上げ構造の変化が歩行感覚に与える影響に関する検討」が日本建築学会環境系論文集、第 78 巻 第 687 号(2013.5)に掲載された。

●川島和彦准教授(掲載時建築学科、現まちづくり工学科)、米山隆晃氏連名の原著論文「地方都市におけるまちなか居住推進のための空き家情報提供制度に関する研究」が都市住宅学会機関紙「都市住宅学」80 号に掲載された。



2013年度の新しい非常勤講師を紹介します！

内村綾乃(うちむら・あやの)

短大(建築・生活デザインの基礎、建築デザインスタジオⅠ)



「好きこそ物の上手なれ」と言うように、好きになることが一番の上達の近道ではないかと思います。建築を学び始めてから数十年になりますが、がむしゃらだった時期、このままで良いのかと悩んだ時期、結局これしかないと思った時期、好きだったからこそ、続けて来られたこと、そしてこれからも続けて行けそうです。ですから皆さんにも建築のどんな分野でも良いので、是非「好き」を見つけてもらいたいです。そしてできるだけ足掻いて見て下さい。そうしたら何かが見えて来るかもしれません。



1990年、日本大学生産工学部建築工学科卒業。1990-1998年、空間研究所勤務。1998年 - A studio 設立

大塚秀三(おおつか・しゅうぞう)

短大(建築施工法)



今年度後期から建築施工法を担当する大塚です。コンクリート工学を中心とした建築材料の研究を専門としています。アトリエ系設計事務所に勤めていた経験から、授業では建築のデザインを具現化するためには施工をどのようにすれば良いのかという観点から皆さんと共に考えていきたいと思っています。街を歩いているときに、気になる建築があったらどのように施工したのかを考える「観察力」を磨くことをおすすめします。“建築”の楽しさを皆さんと共有できたらと思います。



1993-1998年、川口通正建築研究所。2005年、ものづくり大学技能工芸学部建設技能工芸学科卒業。2013年、日本大学大学院理工学研究科博士後期課程修了。2013年、ものづくり大学技能工芸学部建設学科准教授

小林章二(こばやし・しょうじ)

理工(建築法規Ⅰ)



真実は、1981年に竣工した事務所建築です。間口の狭い小さなオフィスビルですが、企画から設計、監理に至るまで初めて担当したデビュー作です。数ある中でも苦勞した分だけ、想い出に残る建物となりました。今でも前を通るたびに、当時のことを想い出し、一つ一つの過程の重要性を感じています。



建築法規というと、難解な法令条文により苦手意識をもたれる方が多いのですが、まずは法の趣旨を理解することを心掛けて下さい。建物の基本は、安全で安心できる器だと思います。まずは自身の良識で判断をする、そしてこの良識の基準が建築基準法に繋がる訳です。この様なスタンスで法規に向き合えば良いのでは、と思います。写真

1976年、日本大学理工学部建築学科卒業(木村翔研究室)。1976-1993年、川上玄建築事務所。1993年、小林設計室設立代表取締役。管理建築士講習他講師

大井裕介(おおい・ゆうすけ)

理工(デザイン基礎、建築設計Ⅰ)



建築という分野はとても広大で歴史や思想・哲学、芸術性やモラルなど今日まで集積された多くの建築や建築論があります。設計の課題を通して、建築単体のデザインだけではなく、都市や現代社会の人々のライフスタイルや歴史を踏まえて未来を切り開く新しい建築を目指してほしいと思います。大学生活の中では、課題や授業をこなすだけではなく、多くの建築やアートや自然など美しいものにふれてひとりひとりがより豊かな感性を磨くことも大切なことです。建築をつくっていく上で社会に出てからもそれは必ず役にたつと思います。



2000年、日本大学理工学部建築学科卒業。2002年、日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了(若色研究室)。2002-2012年、西沢立衛建築設計事務所勤務。2012年、大井裕介建築設計事務所設立

大藪元宏(おおやぶ・もとひろ)

理工(建築設計Ⅱ・Ⅲ、設計演習Ⅰ)



何かを「デザインする」という行為は建築に限らず楽しい行為です。それは、形を伴うこともあれば伴わないこともあります。建築を生みだしてゆく過程では、知らず知らずのうちに無数の葛藤、取捨選択が繰り返し行われますが、それは、頭意識だけでなく潜在意識の中でも行われます。迷った時は、自分の潜在意識に聞いてみる方がよりビジュアルな答えが出てくることが多いように思います。試行錯誤を面倒くさらず、また、頭の中だけで考えず、常に手を動かして五感で感じながらスピード感を持って「デザインする」という行為を楽しんでほしいと思います。



1982年、武蔵工業大学工学部建築学科卒業。1982-89年、地方の設計事務所にて専ら木造建築の設計監理に従事。1990-2001年、横河設計工房勤務。2001年、環境建築総合研究所設立。(2011年、大藪元宏建築研究所に改組)

菅原大輔(すがわら・だいすけ)

理工(デザイン基礎、建築設計Ⅰ)



好きな映画に「マトリックス」と「インセプション」がある。どちらも、脳内あるいは夢という疑似世界で物語が展開する。その中で「Architect=建築家」は、その世界の設計者として描かれる。社会や環境を総合的に設計する建築家像は、実は今に始まったことではない。紀元前の書物「建築書」で既に語られている。情報化や震災で既存の価値や仕組みが崩れてしまった今、「建築」を学ぶことは、新しい世界の設計に繋がるとも言えるでしょう。「社会での役割」を志向/思考しながら、皆さんと共に「建築」を学びたいと思います。



2000年、日本大学理工学部建築学科卒業(若色研究室)。2003年、早稲田大学大学院修士課程修了。2004年、シーラカンズアンド・アソシエイツ。2004-2005年、Jakob+Macfarlane。2006-2007年、Shigeru Ban architect Europe。2008年、SUGAWARA DAISUKE 設立

the new teachers

西沢大良(にしざわ・たいら)

理工 (大学院 | 建築デザインⅠ、Ⅱ)

学生の皆さんには、自分の将来を本当の意味で大事にしてほしいと思います。自分の人生や職業を「本当に」大事にするのなら、たとえば今の日本の大手企業のなかで一生安心して勤められるようなところは皆無である、と気づくはずです。皆さんが40歳になるころには、その多くは消滅したり、吸収合併されたり省庁再編されているでしょう(つまり人員削減・大量解雇がなされる)。もちろん、さしあたって企業や役所に就職しても良いですが、間違った幻想を抱かないようにしてください。冷静に考えれば、どんな企業に就職しても、勤められるのは15年程度です。であれば、その15年間に身につけたスキルが、その先の自分を助けてくれる唯一の資産になるはず。そうしたスキルを1秒でも早く身につけるために、今この瞬間から全ての機会を利用してください。「あなたしかもっていないスキル」であれば何でもかまわない。設計だけではなく、話術、力仕事、統率力、何でもかまいません。オンリーワンのスキルを身につけられれば、一生失業も絶望もないでしょう。



1987年、東京工業大学工学部建築学科卒業。1987-1993年、入江経一建築設計事務所勤務。1993年、西沢大良建築設計事務所設立。2013年、芝浦工業大学工学部建築工学科教授

長谷川洋平(はせがわ・ようへい)

理工 (デザイン基礎、建築設計Ⅰ)



1年生の設計の授業を担当しています。建築の基礎的な部分、例えば線をきれいに描くことや、自分の作品を相手に丁寧に説明することは、手習いのようなもので、練習すれば誰でもある程度の技術を身につけることができます。

でも繰り返しを続けることがむずかしい。その先の建築することの楽しさを実感できないと続きません。私が学生の時に非常勤の先生方が建築することの楽しさを教えてくれたように、少しでもその魅力を皆さんに伝えることができればと思っています。建築することを通して社会や文化へのまなざしを共に養っていきましょう。



2001年、日本大学理工学部建築学科卒業(高宮研究室)。2004年、東京工業大学大学院修士課程修了。2004-2006年、みかんぐみ勤務。2007-2009年、日本大学理工学部建築学科助手。2009年、長谷川大輔構造計画

浜島一成(はまじま・かずなり)

理工 (測量及び実習)



エジプト・アコリス遺跡

今年度前期から「測量及び実習」を担当する浜島一成です。よろしくお願ひします。修士課程1年の時に、エジプトの古代遺跡の調査隊員に選ばれ、その時に課せられたミッションが神殿の測量でした。その調査から今日まで、古建築の実測や測量に取り組んでいます。測量では、如何に正確に距離や角度を測れるかが重要です。1m+1mは計算上では2mですが、測量の測定では2mとなりません。測量の測定には必ず誤差が含まれるからです。授業では、様々な測量機器や計算式を使用して、この誤差について分かり易く説明したいと思います。



1981年、日本大学理工学部建築学科卒業。1983年、日本大学大学院修士課程修了。1990年、日本大学大学院博士課程修了。1990年、しま総合研究所。1997年、日本大学短期大学部・中央工学校等の非常勤講師

深澤組個(ふかざわ・くみこ)

短大 (インテリア計画Ⅰ)



吉祥寺H邸

目の前にいる人に「インテリアの楽しさと美しさを伝えたい!」と思って、仕事をしています。お客様に対しても、学生に対しても同じです。インテリアで人々を笑顔にさせましょう!そこには、社会性の

ある提案が必要です。今抱えている身近な問題点を解決し、そして新しい提案と挑戦のあるプレゼンテーションが理想的です。豊かなライフスタイルの考え方を学び、インテリアの基礎を学び、リサーチの手法を学び、プレゼンテーションツールとそのトークを学び、インテリアが好きなあなた自身が輝いて下さい!



1989年、町田ひろ子インテリアコーディネーターアカデミー卒業。1991年、インテリアコーディネーターオフィスic.press主宰。1997年、町田ひろ子アカデミーコーディネーション講師

梶田佳寛(ますだ・よしひろ)

理工 (大学院 | 建築材料特論Ⅱ)



建築基準法の第一条は、「この法律は、建築物の敷地、構造、設備及び用途に関する最低の基準を定めて、国民の生命、健康及び財産の保護を図り、もつて公共の福祉の増進に資することを目的とする」と定めています。建築物は、人間生活や社会活動の器であり、人の命や財産を守れるように設計され、実現されねばなりません。建築材料工学は、設計された建築を具体的な建物として実現する学問体系・技術体系であり、建築材料特論Ⅱでは特に建物の寿命に着目して授業を進めます。



1975年、東京工業大学大学院修士課程修了。1975-1995年、建設省建築研究所。1995-2004年、宇都宮大学教授。2004-2013年、国立大学法人宇都宮大学教授。2013年、宇都宮大学名誉教授

水野吉樹(みずの・よしき)

理工 (大学院 | 建築デザインⅡ)



西麻布K邸

いまでも学生のころの課題や卒業設計作品を思い出すことがあります。それは、そのときに見つけたもの、気付いたことが、現在の自分の目指すべき建築の原点となっているからかもしれません。建築とその周辺の仕事に携わる人にとって、大学でのデザインや設計に関わる授業での経験は、社会で自身の想いを具現化する力を養うための、大切なステップだと考えます。若い豊かな感性を武器にして、視野を拡げ、興味のあること得意なことにどんどん挑戦し、自分なりの夢や目標を見つけてほしい。皆さんとの対話のなかで、そのためのアドバイスができたと思っています。



1983年、日本大学理工学部建築学科卒業。1985年、日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了(建築史建築論・近江研究室)。1985年、(株)竹中工務店入社。現在、同東京本店設計部部長

毎号、一枚の建築写真！

A Photo of World Architecture vol.05 FabCafe

あなたは、ファブをしたことがありますか？

FAB（ファブ）とは、世界で広がっている「ものづくり革命」のムーブメントのこと。大量生産やマーケットの理論に制約されない「FABrication（ものづくり）」と「FABulous（愉快的な、素晴らしい）」の2つの意味が込められている造語で、このネットワークが今、世界中に広がっています（2011年4月時点で、世界20カ国、50カ所以上）。

このような理念を持ち、個人でも自由にものづくりができる拠点として、この数年 FabLabo（ファブラボ）という場所が、鎌倉、つくば、渋谷、北加賀屋と増えてきています。ここでは3次元プリンタやカッティングマシンなどの工作機械を備えていて、子どもから大人まで、誰もが気軽にデジタル・ファブリケーション技術を利用することができます。どんな人でも「つくる人」になれる。いわば、ものづくりの可能性を広げるための実験工房というわけです。

そして、2012年3月には、渋谷に FabCafe（ファブカフェ）が誕生しました（設計：成瀬・猪熊建築設計事務所）。一見普通のカフェのように見えますのですが、中には、レーザーカッターをはじめ様々なデジタル工作機械が備えられていて、予約をしてスタッフの方に相談しながら、いろんなものをつくることができます。レーザーカッターでノートパソコンの本体や iPhone カバー、グリーティングカードに絵を描く人、アクセサリや椅子、照明までもつくってしまう人（実は、世界には家まで Fab でつくってしまった人もいます！）。

右にあるのは FabCafe のホームページ。FabCafe では、日々いろんなファブにまつわるいろんなイベントが開かれています。この夏にもきっといろんなイベントが開かれていると思うので、是非一度何かに参加してみるのはどうでしょう。もちろんカフェとしても利用は可能です（運がいいと、P24 のイベント巡礼に登場した岩岡孝太郎さんに会えるかも。岩岡さんは FabCafe のディレクターでもあります。あのカーテンもレーザーカッターでできたもの）。

20世紀は大量生産大量消費の時代から、パーソナル・ファブリケーションの時代へ。さあ、あなたは何をファブしますか？

<http://tokyo.fabcafe.com>



ミニチュアFabWorldワークショップレポート

By [sennaka](#), 6月16日, 2012 | Event Report, 高評価 | 9 Comments

皆様こんにちは！FabCafeのみなさん！

8月1日に開催したワークショップ「FabCafe presents ミニチュアFabWorld～ピエス編～」のレポートをお届けいたします。

今回のワークショップは、開催開始3日目にしるしを渡すほどの注目度！ものづくりはしたことがない、というお客様から、普段お仕事をアウセサリーを作っているというお客様まで幅広くご参加頂き、お話をしながらみんなでワークショップを楽しみました。

Continue reading →

紙、好きですか？ 竹尾の紙に触れて、遊ぶ！Let's You Fab キャンペーン～Fab 先着100名様にお好きな紙をプレゼント～

By [FabCafeAdmin](#), 6月11日, 2012 | Information | 9 Comments

突然ですが、質問です。

目の前に一枚紙があります。「この紙を使って、なんでも好きなことをしていいよ！好きなものを作ってください！」そう言われたら、何をしますか？

折る、割る、貼る、切る、ちぎる、書く、包む、切る、接着する……。さて、みなさんの答えはどんなものだったでしょう？

ちょっと考えただけでも、あ、こんなこともできる、あんなこともできるかも？とワクワクしませんでしたか？ 高度な技術や、難しい知識は必要なし！ 手があれば、何でもできる——それが「紙」という素材です。

もっともっと、皆さんに「紙」に触れてもらいたい FabCafe では、6/12 から7/15まで、紙の専門商社、株式会社竹尾にご協力いただき、紙の展示を行います。

Continue reading →

FAB利用方法が新しくなりました！

By [sennaka](#), 6月14日, 2012 | Information | 9 Comments

本日6/14からレーザーカッター、3Dプリンタの利用方法が新しくなります。

全てのお客様にFabを楽しんで頂けるよう、ご利用方法に合わせて3種類のFabタイムをご用意しております。

	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat	Sun
9 am							
10 am							
11 am							

Up Coming Events Events Reports

バズルのようにくみ上げるランプシェードを一緒に作ろう！
2012年6月23日

FabCafe Sweets Party 開催します！
2012年6月30日

Fashion FAB!! ～オリジナルアイテムを身につけよう～
2012年6月19日

3D Snap&Touch
2012年6月13日

コンテスト情報：～You Fab 2012 レーザーカッター～
2012年6月15日

[Go to Calendar](#)

Twitter TL

ツイート @fabcafe_tokyo みんなをフォロー...

FabCafe @fabcafe_tokyo
【ワークショップ】6/23（日）にランプシェードを作るワークショップを開催しますよ。各体のバズルのように組み立てられたランプシェードを2週間から1つを選んで作っていただけます。15時から18時の2回開催です。お申し込みはこちらから [fabcafe.com/events/14970](#) 既読者をみる

FabCafe @fabcafe_tokyo
【ワークショップのご案内】6/23日バズルのようにくみ上げるランプシェードを一緒に作ってくださるか？こちらのランプシェード、実はレーザーで切り出したものなんです！1時間も短時間でみなさんで楽しむことができます。@fabcafe_tokyo 8月1日にツイートする

Facebook TL

FabCafe [fb](#) keep like 10k.

FabCafe 【ワークショップ】6/23（日）にランプシェードを作るワークショップを開催します。FabCafeに展示してある各体で作られた美しいランプシェードも存じます。このスタイルのランプシェードはNYから来たCathyがデザインしたもの。今週末Cathyがデザインしたランプシェード、2週間からお見入りの1つを選んで作っていただけます。15時から18時の2回開催です。お申し込みは...

FabCafe Global Site Open!
11ヶ国語に翻訳完了

運営アートファクトリー 計画 **DIWO Lab.**
DIWO Lab. is a place for creative people to share their ideas and skills.

Archive

Think 3D
FabCafeの3D FAB

FabCafe on Google+
FabCafeで生まれた作品を毎日アップ

PICKUP FABs
最新の作品をピックアップしてご紹介

Welcome to FabCafe

東京都渋谷区東1-32-7 3階 東宝ビル
渋谷区
03-6415-9190（店舗）

Contents

02 [SPECIAL FEATURE]

2013 年日本建築学会教育賞受賞記念インタビュー
世界に広がる「けんちく体操」
 - 授業では伝え切れないことの大切さ -

08 [LAB THE WORLD]

研究室を巡るインタビューシリーズ不定期連載
 地震と建築の関係を見つめ続ける対震構造研究室
 (インタビュー：古橋剛教授)

12 [REPORT]

短大建築・生活デザイン学科オリエンテーションレポート
 日本大学雄勝スタジオレポート
 関西研修旅行レポート

18 [NEWS & TOPICS]

建築学科 4 年生の江崎桃子さん、行徳美紗子さん、小島弘旭くんが、
 「レモン展 Portfolio Review 2013」にて、各賞を受賞！
 横河健教授が、第 19 回千葉県建築文化賞、第 6 回横浜・人・まち・デザイン賞を受賞！
 2013 年度の新しい非常勤講師を紹介します！
 他

22 [A PHOTO OF WORLD ARCHITECTURE]

vol.05 FabCafe

24 [EVENT REVIEW]

mosaki のイベント巡礼 vol.5
 「マテリアライジング展 - 情報と物質とそのあいだ／23 名の建築家・アーティストによる思索 -」

SHUNKEN

2013 Jul. Vol.41 No.2

「駿建」

発行日：2013 年 7 月 10 日

発行人：岡田章

編集委員：佐藤慎也・橋本修・田嶋和樹・長岡篤・古澤大輔・中田弾・田所辰之助・高田康史

編集・アートディレクション：大西正紀 + 田中元子 / mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台 1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

event review

mosakiのイベント巡礼 vol.5

マテリアライジング展

-情報と物質とそのあいだ／23名の建築家・アーティストによる思索-

2012年6月8日（土）～23日（日）会期終了

最先端デジタル技術の ものづくり

◆建築設計から構造、プロダクトやアートまで、コンピューティショナルデザインやデジタルファブリケーションの最先端の人々が勢揃い！日本でこんな展覧会が開催されるなんて、本当に感慨深いなあ。

♥ちょ、ちょっと待って。コンピュ……？

◆コンピューティショナルデザインは、コンピュータでさまざまな情報を入力してデザインすること。デジタルファブリケーションは、コンピューティショナルデザインに加えて3Dプリンターやレーザーカッターといったもので出力するものづくりのことなんだ。まあとにかく、作品を見てみようよ。

♥完全な完成品というより、開発途中のものやモックアップが多そうに見えるね。ぱっと見てそれが何なのか、わかるものはほとんどないじゃない？

◆けど、そのつくられ方を知れば知るほど、驚かされるものばかりだよ。例えば岩岡孝太

郎さんが出展している『Knitting Paper Curtain』（下写真）。レーザーカッターで切り抜かれたたくさんのパーツを編んでつくられたカーテンなんだけど、パーツの形ひとつひとつが、風通しや光の加減など、好みのカーテンに仕上がるように、コンピュータで解析、計算されたデザインなんだ。こんなふうに、ひとりひとりが自分の感覚に合わせたデータを入力して、自分だけのものをつくることができるっていうわけ。



♥なるほど、コンピュータを利用したオーダーメイドみたいなことができるのね。

◆そうそう。それにコンピュータで素材の劣化予測なども計算できてしまうから、建築の設計に利用されたら、搬入から施工、その後

の管理まで、大幅に無駄をカットできる。極限まで合理的になるんだよ。

♥展示を見ているだけでは全然日常的に見えないんだけど、そう考えると、将来的には、この分野がごく身近なものを変える可能性があるんだね。

◆彼らが変わるだけじゃなくて、僕ら自身がコンピューティショナルデザインに参加したり、デジタルファブリケーションによるものづくりを手がけることも十分にあり得るし、それによって生活や価値観を変えることだって考えられる。すでに出展者のAnS Studioは「ソニーシティ大崎」でコンピューティショナルデザインによるランドスケープを手がけたりしているから、将来というより、今すでに起きている現実の話なんだよ。

♥すごいね、ものをつくる上でのコンピュータの可能性が、そこまで開拓されているんだね。展示を見ているとなんだか、ワクワクしてきた。革命前夜って感じ！

◆単純だなあ。



写真は、コンピューティショナル・アーキテクトで折紙工学者舘知宏さんによる『フリーフォーム・オリガミ』。一枚の平面を折り曲げることで、こんな形がでちゃう！人間では不可能な造形。コンピュータ解析と人間の構想力によってできるもの。

Recommend | 2013年7-10月

【1】「あいちトリエンナーレ 2013」| 愛知芸術文化センターほか |

会期：2013年8月10日（土）～10月27日（日）

アートが街に飛び出し、都市の祝祭で賑わった2010年の「あいちトリエンナーレ」から3年。再び国際芸術祭が愛知で開催！今回の芸術監督は、建築史家で東北大学教授の五十嵐太郎氏。今回は名古屋市内の美術館を飛び出すまちなか展開のほかに、岡崎市内にも会場を設置。また会場間を移動する途中、目に入る建築を鑑賞するためのガイドを提供したり、普段は入ることができない建物公開のイベントを実施する。青木淳、藤森照信、藤村龍至、石上純也、宮本佳明、打開連合設計事務所といった建築関連の展示も目が離せない。

【2】「瀬戸内国際芸術祭 2013」| 中西讀の島々も会場に加えた瀬戸内海の12の島（直島、豊島、ほか）と高松港、宇野港周辺 | 会期：2013年7月20日（土）～9月1日（日）

こちらも2回目となるアートの祭典。瀬戸内海に浮かぶ12の島でさまざまな展示が行われる。こちらでも、安藤忠雄、妹島和世、西沢立衛、みかんぐみ、三分一博志、石上純也など、建築家たちによる展示が目白押しだ。

【3】「アンドレアス・グルスキー展」| 国立新美術館（東京都港区六本木 7-22-2）| 会期：2013年7月3日（水）～9月16日（月・祝）

ドイツの現代写真を代表する写真家、アンドレアス・グルスキーによる日本初の個展。抽象絵画のような写真？写真を使った画家？すべてが等価に広がる独特の視覚世界を構築し、国際的な注目を集めている作品を、まとめて見ることができる貴重な機会。

【編集後記】

今号の特集では、私たちが普段、建築関連のメディアをつくる仕事をしながら、週末の部活動のように活動している「けんちく体操」について、今村先生、佐藤慎也先生とお話をさせていただきました。ワークショップを全国で開催する一方で、「記念写真は「けんちく体操」で！」ということをや、世界に向けて発信しています。最近では、子どもから大人まで、少しずつ実際の建物の前で「けんちく体操」してくれる人が増えてきました。さあ、みなさんも、ついに夏休みですね！きっといろんな場所に足を運んで、友だちと記念撮影をすることでしょう。だからその時には、もうピース写真は禁止です！！一度振り返って、建物をよく観察して、そしてみんなで「けんちく体操」をつくる。そして撮影を！ぜひ写真を私たちに送ってください。（大西正紀 + 田中元子 / mosaki）